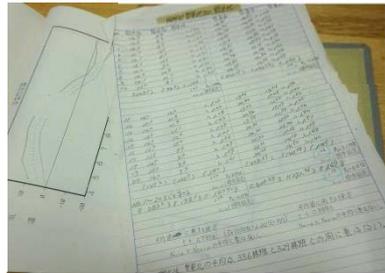


センター通信

写真：どんぐりをかき集めて食べているヒグマ



現在の記録は電子データが主流だが、平成初期は手書きで残されているものが多い



シードトラップの中のどんぐりを回収している様子



どんぐりの集計の様子

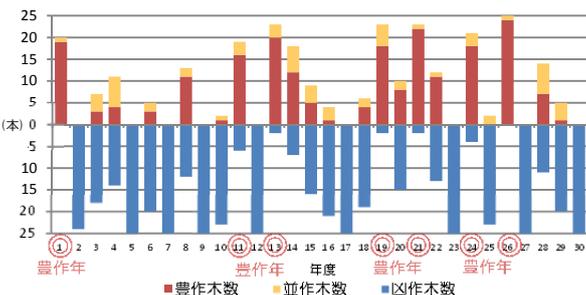


図1. 調査木毎の豊凶判断頻度 (調査木 25本を1本ずつ豊凶判断し、その本数を示した)

はじめに

知床森林生態系保全センターでは、平成元年からミズナラ堅果（以下：どんぐり）の結実量調査を実施しています。今年度で30年の節目を迎え、これまでの調査の内容や過去の資料から30年の調査のあゆみについて報告します。

背景

この調査は当初、有用広葉樹であるミズナラの天然林施業に資するために、種子生産のメカニズムを解明することを目的として開始しました。近年では、知床世界自然遺産地域におけるヒグマ等の野生動物の適正な維持管理のために、重要な食物資源であるどんぐりの結実量

の推移をモニタリングするという位置づけのもと調査を継続して行っています。

調査の流れ

【1. プロット設置】

ミズナラの調査木は岩尾別地区に10本、イダシユベツ地区に15本設置し、一調査木あたり3個、合計75個のシードトラップを設置します。

【2. どんぐりの集計】

シードトラップの中に落下したどんぐりを回収し、事務所で集計作業を行います。1週間おきに回収を行います。豊作年は1度の回収につき、どんぐりが1000個を上回ることもあります。

物たちにとってうれしい豊作年ですが、集計作業を行う職員にとって根気がいる年でもあります。

【3. データ分析と情報発信】

どんぐりの集計が終われば、データ分析にかかります。結果をまとめ、報道機関や知床世界自然遺産地域の科学委員会に向けて情報発信を行います。

結果

平成元年から30年までの豊凶周期性は確認できませんでしたが、豊作か凶作か極端な傾向を示すことが明らかにになりました。30年間の

うち豊作年は7回みられ、おおよそ4年に1回の頻度で豊作となることが分かりました(図1)。

また、一般的に凶作年はヒグマの人里への出没が増加する傾向にあるようですが、知床(斜里側)では、そのような傾向は確認できませんでした。ヒグマの出没には、どんぐりの豊凶だけではなく、ヒグマの食物資源となるサケマスの遡上状況やハイマツ等の豊凶、そして、人馴れ問題などさまざまな要因が関係し合っているのではないかと考えられます。